

令和 4 年度

研究紀要



秋田県立由利高等学校

由利高生に最適のカリキュラムを探して

校 長 水谷 佳延

45分授業が導入されてから学習指導要領が二巡しようとしている。かつての50分×6コマ×5日というのは平成13年度までであり、完全学校週5日が導入された翌年平成14年度には火曜日から金曜日までが50分×6コマで、月曜日は7コマとなった。ただし、これはだいぶ評判が良くなかったようで、翌年の平成15年度にはなんと0校時15分と6.5校時25分が50分6コマにプラスされた。これが3年間続いた後の平成18年度に現行と同じモデルが登場した。学校現場は、学校週5日が実施されて今年で21年を迎えているにもかかわらず、この問題を克服できていないのだ。最もこの問題は正確には、現場に投げられた問題と表現するべきであろうが、それを個々で議論する余裕はない。ここで週当たりの時間を確認したい。

本校日課の変遷

		週当たり
～平成 3 年	$(50\text{分} \times 6\text{コマ} \times 5\text{日}) + (50\text{分} \times 4\text{コマ}) =$	1, 700分
平成4年～平成13年	平均	1, 650分～1600分
平成14年	$(50\text{分} \times 7\text{コマ}) + (50\text{分} \times 6\text{コマ} \times 4\text{日}) =$	1, 550分
平成15年～	$(15\text{分} + 50\text{分} \times 6\text{コマ} + 25\text{分}) \times 5\text{日} =$	1, 700分
平成18年～	$45\text{分} \times 7\text{コマ} \times 5\text{日} =$	1, 575分

※平成4年～6年は月1回、平成7年～13年は月2回土曜日が休業

私が最初に本校に赴任したのは平成7年3月までだったので、平成13年度からおそらく職員会議等で交わされた内容は知るよしもないが、平成14年の日課がたった1年限りだったことを考えれば、授業時数確保に当時の先生たちが躍起になっていた様子が浮かび上がってくる。平成19年度に閉課程となった生活科学科に変わり新たに登場した普通・理数・国際科の使命は紛れもなく学力向上であり、その中核を担ったのが現行の時間割であるのは間違いない。導入から16年が経過し、一定の役割は果たしたと思う。

県内の他校が今年度からの新カリキュラム導入に合わせて、時間割の変更を続々と行った。文武両道を掲げる本校が、生徒の多様な進路希望に応えることを域内の中学校に宣伝し、部活動や進路面において顕著な実績を上げつつ、職員の多忙化をも解消できる「魔法の薬」はないのか。本校の実情に即したカリキュラムの構築について、現行案の継続も含めて教科や学年でぜひとも話し合いを重ねていただきたい。

目 次

巻頭言

校 長 水谷 佳延

1 令和4年度 授業改善の取組

授業改善の取り組みと流れ

授業アンケート

教務部

2 研修報告

A講座「実践的指導力習得研修講座」

土井さくら

B講座「高等学校保健体育科授業の充実」

土井さくら

B講座「これからの運動部活動の在り方」

齊藤 広樹

B講座「高等学校道德教育推進研修講座」

佐々木勝則

1 令和 4 年度 授業改善の取組

- 授業改善の取組と流れ
- 授業アンケート

令和4年度 授業改善の取組

教務部 野澤 幸子

1 授業改善共通テーマ（令和3年度指導主事学校訪問1か月前課題）

「主体性を育み、思考を深めるための授業実践」

- ① 「何ができるようになるか」を明確にした目標の提示
- ② ICT機器を活用し主体性を高める工夫
- ③ 振り返りのタイミングと方法の工夫

2 テーマ設定の背景

○由利高校の教育目標及び育てたい生徒像

（1）教育目標

平和的な国家及び社会の形成者となるよう、「真実為原」の校訓のもと次のような生徒を育成する。

- ① 自主的に学び、創造に努める知性豊かな生徒
- ② 郷土を愛し、敬愛の念あふれる情操豊かで気品のある生徒
- ③ 勤労と責任を尊び、実践力のある健康明朗な生徒

（2）教育方針

- ① 自主的・積極的な学習態度を身に付け、学力の向上を図りながら進路意識を高める。
- ② 生徒一人ひとりの個性を伸張させ、豊かな心で健やかな人間の育成を目指す。
- ③ 礼儀を重んじ規律ある生活を身に付け、集団生活の在り方生き方の自覚を図る。

（3）重点努力目標

生徒が自ら学ぼうとする授業づくりと生徒個々に対応した進路指導

- ① 課題意識をもち、積極的に学ぶ生徒の育成・・・授業力の向上
- ② 計画的・組織的な進路指導の実現・・・進路指導の充実
- ③ 生きる力の育成を目指したキャリア教育・・・人間力の育成
- ④ 教師の力量を高める校内研修の充実・・・教員研修の充実

（4）各学科の目標

【普通科】主体的・協働的な学習活動を通して、社会に貢献できる人材の育成を目指す等

【理数科】探究的な学習活動を通して、自ら学び、自ら考え、提案できる人材の育成を目指す等

【国際科】豊かな教養と協働の精神を有し、国際社会及び地域社会で積極的に行動しようとする人材の育成を目指す等

（5）育てたい生徒像

（ア）真実為原の精神の下、世界平和と社会の発展に貢献し、多様な価値観をもつ相手と協働できる能力と人間性をもった生徒

（イ）文武両道を通して、確かな学力、豊かな心、健やかな体を身に付けることで自己実現と社会貢献できる生徒

（ウ）進路目標の達成に向け、自分が選択した目標に対して幅広い知的興味や探究心をもつとともに、主体的に学び、考え、判断し、行動できる生徒

○新学習指導要領

○令和3年度授業改善の取組の成果と課題

3 授業改善の取組の流れ

- 4月…校長によるカリキュラム・マネジメント、教育目標・重点努力目標等の提示（4/4 職員会議）
- 5月…令和4年度授業改善共通テーマの職員会議での提示と呼びかけ
- 6月…職員研修（ICT活用校内研修会①初心者向け、②中堅者向け）
- 7月…授業アンケート①実施
- 8月…授業アンケート①結果の分析と報告
- 9月…授業アンケートの結果を受けた授業改善（～11月）
 - 職員研修（ICT活用校内研修会①初心者向け、②中堅者向け）
- 12月…授業アンケート②実施
- 1月…授業アンケート②結果の分析と報告
- 2月…分掌評価会議（今年度の授業改善の総括）
- 3月…次年度の授業改善テーマ及び取り組み内容等の検討

4 授業改善の取組のための共通理解

- ① 授業改善共通テーマの認識
- ② ICT機器の積極的な活用
- ③ 授業改善に役立つような情報の提供及び共有
- ④ 積極的な授業参観

5 成果と課題（授業アンケート*の結果を踏まえて）

*別紙「授業アンケートについて」参照

「授業目標の提示」及び「振り返り」がほぼすべての教科で行われ、授業改善の取組の肝として定着してきている。ただし、両者を比較すると昨年度と同様「振り返り」の割合が下がる傾向にあり、それを踏まえ、今年度は振り返りの「タイミングと方法の工夫」を意識してもらったが、今後も工夫が必要という結果になった。

また、特に5教科では、「目標提示」に対して「興味・関心」が下がる傾向にある。「興味・関心」は、生徒の『学ぶ意義』『好き』『得意』に直結するものである。授業アンケートでは、生徒自身の学習に対する意識や姿勢等についても質問している。それによると、「先生に指示されたことだけを学習するのではなく、自分から進んで知識を増やそうとしたり、疑問点を調べたり、問題に取り組んだりしている。」という質問に対する回答率が高い教科・科目は、『学ぶ意義の理解』『好き』『得意』の回答率も高く、相関が認められる。わかりやすさやワクワク感のある目標提示の工夫は生徒に『学ぶ意義』を導き『好き』や『得意』をもたらすかもしれない（『学ぶ意義の理解』『好き』『得意』の間でも相関が認められる）。

他に、主体性を促すとして「ICT機器の活用」「グループ活動や話し合い」「日常生活と関連づけること」等を生徒自身が授業改善に望んでいることがわかった。「ICT機器の活用」は、昨年度の「とにかく使ってみる」段階から今年度は「効果的に使う」段階、に入ったと言え、まさにICTの「C」の部分の活用方法が問われた。授業でのICT活用を促す職員研修や授業改善のための情報提供と共有を図る共有ドライブ（「ICT関連マニュアル」「授業改善」）等、昨年度にはなかった取組も始まり、活用の幅は確実に広がっている。他方でICTの活用には教員間・教科間で差が広がりつつあることも事実であり、その差が生徒の意欲や学力に影響しないよう研修等の機会をどう担保するか、あるいはより実効性のある研修にするにはどうすればいいのか等課題は少なくない。これまで以上に分掌、学年、学科間で連携を図り、生徒一人ひとりの力を最大限にひきだせるような授業改善の取組を組織的に続けていきたい。

【別紙】

R 4 授業アンケートについて

教務部

1 スケジュール

- | | |
|-----------------------------|-------------------------|
| ① 1回目アンケート実施 | 7月6日(水)～7月21日(木) |
| ② 結果分析・報告 | 8月職員会議 |
| ③ 結果を受けた授業改善 | 9月～11月 |
| ④ 2回目アンケート実施 | 12月7日(水)～12月21日(水) |
| ⑤ 結果分析・報告 | 1月職員会議 |
| ⑥ 来年度の授業改善テーマ及び
取組内容等の検討 | 2月～3月 |

2 実施方法

- ・ **上記期間内の各科目の授業中に10～15分程度時間をとり、Gmail で送ったリンクから、Google Forms で入力させる。**
- ・ 欠席した生徒に対しては基本的に教科担任が、期間内に入力を済ませておくよう呼びかける。また、教務部で入力状況についてチェックし、必要に応じて学級担任に声かけをお願いする場合もある。

3 質問項目

◇生徒用

(1) 授業について

選択肢

「1 全くそう思わない 2 あまりそう思わない 3 ややそう思う 4 非常にそう思う」

- ① 授業目標が毎回示されている。
- ② 授業目標は、わかりやすく学ぶ内容に対する興味・関心が高まるものである。
- ③ 授業中にICT機器（タブレットや電子黒板等）を活用して、知識の定着を図ったり考えを深めたりする場面がある。
- ④ 授業中にペアワークやグループワーク等で対話的な学びを行う場面がある。
- ⑤ 毎回の授業後または単元終了後等に、学んだことを振り返る機会がある。
- ⑥ 振り返りによって、学んだ知識や技術等が身に付いたこと（あるいは身に付いていないこと）を実感することができる。
- ⑦ 授業を受けて、この教科・科目への興味・関心が高まった。
- ⑧ 授業を受けて、この教科・科目の学力が伸びたと感じる。

(2) 自分の学習に対する意識・姿勢等について

選択肢

「1 全くあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 ややあてはまる 4 非常にあてはまる」

- ⑨ 予習をして授業に臨んでいる。
- ⑩ 授業目標を確認し、何を学ぶのか「見通し」を持って授業に臨んでいる。
- ⑪ 意欲的に授業に参加している。
- ⑫ 授業内容の復習をして、定着に努めている。

- ⑬ 先生に指示されたことだけを学習するのではなく、自分から進んで知識を増やそうとしたり、疑問点を調べたり、問題に取り組んだりしている。
- ⑭ 疑問点や理解できなかったことを積極的に先生や友人に聞くようにしている。
- ⑮ 難しい問題に対しても簡単に諦めずに粘り強く取り組もうとしている。
- ⑯ 自らの学習姿勢や学習方法を振り返り、反省して改善しようとしている。
- ⑰ この教科・科目を学習する意義を理解している。
- ⑱ この教科・科目が好きである。
- ⑲ この教科・科目が得意である。

(3) 自分がより主体的にこの教科・科目の学習に取り組めるようになるためには、何をどのように改善すればよいと思いますか。(授業内容、自分の意識、学習環境など)

(4) 自由記述 (授業に対する意見や感想など)

◇職員用 (先生方も夏休みまでに入力してくださいお願いします。)

選択肢

「1 全くあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 ややあてはまる 4 非常にあてはまる」

- ① 授業目標を毎回提示している。
- ② 授業目標を常に意識して授業を行っている。
- ③ I C T機器の効果的な活用に努めている。
- ④ 主体的・対話的で深い学びの実現に努めている。
- ⑤ 授業後または単元終了後等に振り返りの時間を確保している。
- ⑥ 授業において言語能力の育成に努めている。
- ⑦ 教科等横断的な視点を持って授業を行っている。
- ⑧ 授業改善に積極的に取り組んでいる。
- ⑨ 学校教育目標や育てたい生徒像等を常に意識して授業を行っている。
- ⑩ 授業目標の提示に関して工夫していることがありましたら紹介してください。
- ⑪ I C T機器の効果的な活用に関して工夫していることがありましたら紹介してください。
- ⑫ 授業の振り返りに関して工夫していることがありましたら紹介してください。
- ⑬ その他授業において工夫していることがありましたら紹介してください。
- ⑭ 由利高校の課題だと考えていることを挙げてください。(授業に関することでも構いません。)
- ⑮ 質問14の課題に対する改善策や対応策として考えていることがありましたら挙げてください。

2 研修報告

- A講座「実践的指導力習得研修講座」
- B講座「高等学校保健体育科授業の充実」
- B講座「これからの運動部活動の在り方」
- B講座「高等学校道徳教育推進研修講座」

「実践的指導力習得研修講座（高等学校2年目）」を受講して

期 日 : 〈Ⅰ期〉令和4年5月19日(木)
 〈Ⅱ期〉令和4年8月25日(木)
場 所 : 秋田県総合教育センター
氏 名 : 土井 さくら

研修の目標

学校教育目標に基づいた教育活動への意識を高め、学習指導やホームルーム経営、生徒指導等についての実践的指導力を身に付ける。

受講内容

Ⅰ 期

10:10～11:40 〈講義・演習〉保護者対応と連携

12:40～14:00 〈講義・演習〉学校組織の一員として ―学校教育目標とホームルーム経営―

14:10～16:15 〈講義・演習〉「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業構想と実践①

Ⅱ 期

10:10～16:15 〈演習・協議〉「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業構想と実践②

受講のまとめ

実践的指導力習得研修講座Ⅰ期では、保護者対応やホームルーム経営についての講義・演習を行い、学級担任として必要不可欠な内容を学ぶことができた。また、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業構想では体育の「深い学び」につながる学習活動を考えた。

〈保護者対応と連携〉

教師の指導内容は生徒を通じて保護者へ伝わるということを大前提に、生徒・保護者との信頼関係を築いていきたい。生徒は家庭で見せる顔と学校で見せる顔が違うことがあるため、保護者からの意見・要望を聞くだけでなく学校からの情報提供を定期的に行うことが大切だ。保護者の苦情・要求等に対しては、「受け止める」「説明する」「質問する」「確認する」という4つのステップで対応していくことを学んだ。研修最後の演習で、保護者対応のロールプレイをした際、お互いの思い込みや先入観を基に話を進めると意見が対立して解決に向かわなかった。教師が、保護者の感情に寄り添いながら事実確認に向かい、真摯に対応しようとする姿勢が模範となっていた。

〈学校組織の一員として 学校教育目標とHR経営〉

ホームルーム経営の目標・具体的施策と学校教育目標とのつながりを考えた。ホームルームの分析では、外部環境要因と内部環境要因に分けて強みと弱みを洗い出した。最後に、洗い出したホームルームの特徴を組み合わせる具体的な施策の検討をした。他の先生方が行っている取り組みや、新たな取り組みのアイディアを知ることができてとても良い機会になった。高校生が中学生に勉強を教える機会を設けたり、保

護者向けの体験授業を行ったりするなど斬新なアイデアが多く出た。

〈主体的・対話的で深い学びの視点からの授業構想と実践〉

深い学びに向かう授業構想の演習で、種目間のつながりについて考えることができた。多くの学校ではバスケットボール、バドミントン、卓球など、複数種目を同時展開している。技能を身に付けても、その種目に特化した技能のみで積み重なっていかない。例えば、バドミントンのスマッシュとバレーボールのスパイクなど運動の技能は互いにつながり合って、類似した動作、戦術があることに気付いた。単元計画を工夫して、連続する2時間で行う学習活動を、違う種目の類似した関連性のある内容にすることで、種目間のつながりが生まれるということが新しい発見だった。生徒がその類似性や、違う種目を交互に組み入れている意図に気づき、主体的な技能の活用・発揮ができることが深い学びにつながると考えた。

実践的指導力習得研修講座Ⅱ期では、模擬授業と研究協議を行った。3名の先生方とグループになり「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業展開し、成果と課題・改善点について授業毎に協議した。

私は日常的な応急手当(熱中症)の授業を行った。導入では、熱中症の症状を過去の経験から思い出し、重症化すると命の危険があることや、応急手当が必要なことを伝えた。生徒の発言に対する返答が良かった、生徒の発言を授業に生かせていたという意見をいただいた。展開部ではロールプレイングを行い、部活動中の熱中症を想定して応急手当の方法を考えさせた。協議では、実演が主体的・対話的な学びになって良かったという意見をいただいた。課題として助言されたことは、深い学びに繋げるために、私が説明した内容を生徒に問いかけることができるということであった。「どこを冷やすのか、それはなぜなのか。」、「なぜ水分補給だけでなく塩分補給も必要なのか。」これらを問いかけることができれば、より深い学びに繋がると感じた。

他教科の先生方からも学ぶことが多くあった。授業の中で「なるほど」と気付く新たな知識や考え方があった。工業(建築)の授業では、熊本地震の例やブランコの例など具体例を通して理解を促していた。国語の授業では、教科書本文の物語の元となった思想に着目した課題があり、生徒の考えを共有する場面が多くあった。決まった解答が無い問いのため、自分と違う意見も出て活発に思考が働いた。今後も主体的・対話的で深い学びを意識して授業研究に取り組んでいきたい。

本県での教職経験も2年目を終えようとしている。今年は初めて学級担任を持ち、教科指導以外にクラス経営にも力を入れた。初めての仕事に困惑することもあったが、学年部の先生方をはじめとして、多くの先生方から助言を頂きやり通すことができた。来年度以降は、生徒の進路実現の手助けができるよう進路指導についての知識や指導力もつけていきたい。

第1学年A組 保健体育科 学習指導案

学校名 秋田県立由利高等学校
指導者 土井 さくら
授業月日 8月25日(木) 5校時

1 単元名 日常的な応急手当(熱中症)

2 本時の計画

(1)ねらい 熱中症などの疾病の際には、それに応じた基本的な応急手当の方法や手順があることを理解し、実習を通して、応急手当ができるようにする。(知識及び技能)

(2) 展開

時間	学習内容・学習活動 等	指導上の留意点	評価【観点】(方法)
導入 (10分)	1 熱中症の症状について、例を挙げて理解する。 2 本時の目標を確認する。	発問：どのような症状が熱中症だろうか？ ・自身や周りの人の経験から思い起こすように助言する。 ・重症化すると命の危険があることを説明し、応急手当の重要性を伝える。	
	熱中症の応急手当の方法や手順を理解し、応急手当ができるようになる。		
展開 (35分)	3 熱中症の応急手当の方法や手順を考える。 (グループ学習) 4 熱中症の発症の仕組みを確認し、なぜ冷却や水分補給が必要になるのかを理解する。 5 3で考えた熱中症の応急手当の方法を教科書のフローチャートと比べる。	・部活動中の熱中症事例を示す。 ・氷やスポーツドリンクなど実際に使用できる物を用意し、どの手順で何をするかを具体的に考えられるようにする。 ・役割分担を明確にするなど、効率よく活動するように促す。 ・1人の場合に何をするかも問いかける。 予想される生徒の動き： 体を冷やす、水分を摂る、 病院に搬送するなど ・図を電子黒板に写しながら、3で考えた方法の理由を考えるよう促す。 ・冷却の重要性を伝える。 ・第一に何を行ったかを聞き、第一に意識を確認することと、その意味を説明する。 ・実際の熱中症死亡事例を挙げる。	【知識・技能】 熱中症の応急手当が必要であること、及び方法や手順について書き出し、実践できている。 (観察・学習シート)
まとめ (5分)	6 本時の学習のまとめをする。	・本時の目標を確認し、熱中症の応急手当の方法や手順について振り返るよう助言する。 ・熱中症予防についても触れる。	

3 協議の視点

主体的・対話的で深い学びを実現するために適切な学習活動であったか。

熱中症の応急手当

()組()番 氏名 _____

【1】どのような症状が熱中症だろうか？

重症度Ⅰ度
(軽症)

重症度Ⅱ度
(中等症)

重症度Ⅲ度
(重症)

【2】こんな時どうする？

夏休み、陸上部の部活動の練習中(1500M走を終えてから)
仲間の部員Aが気分が悪いと訴えてきた。
顔が赤く、目がとろんとして苦しそう。

①

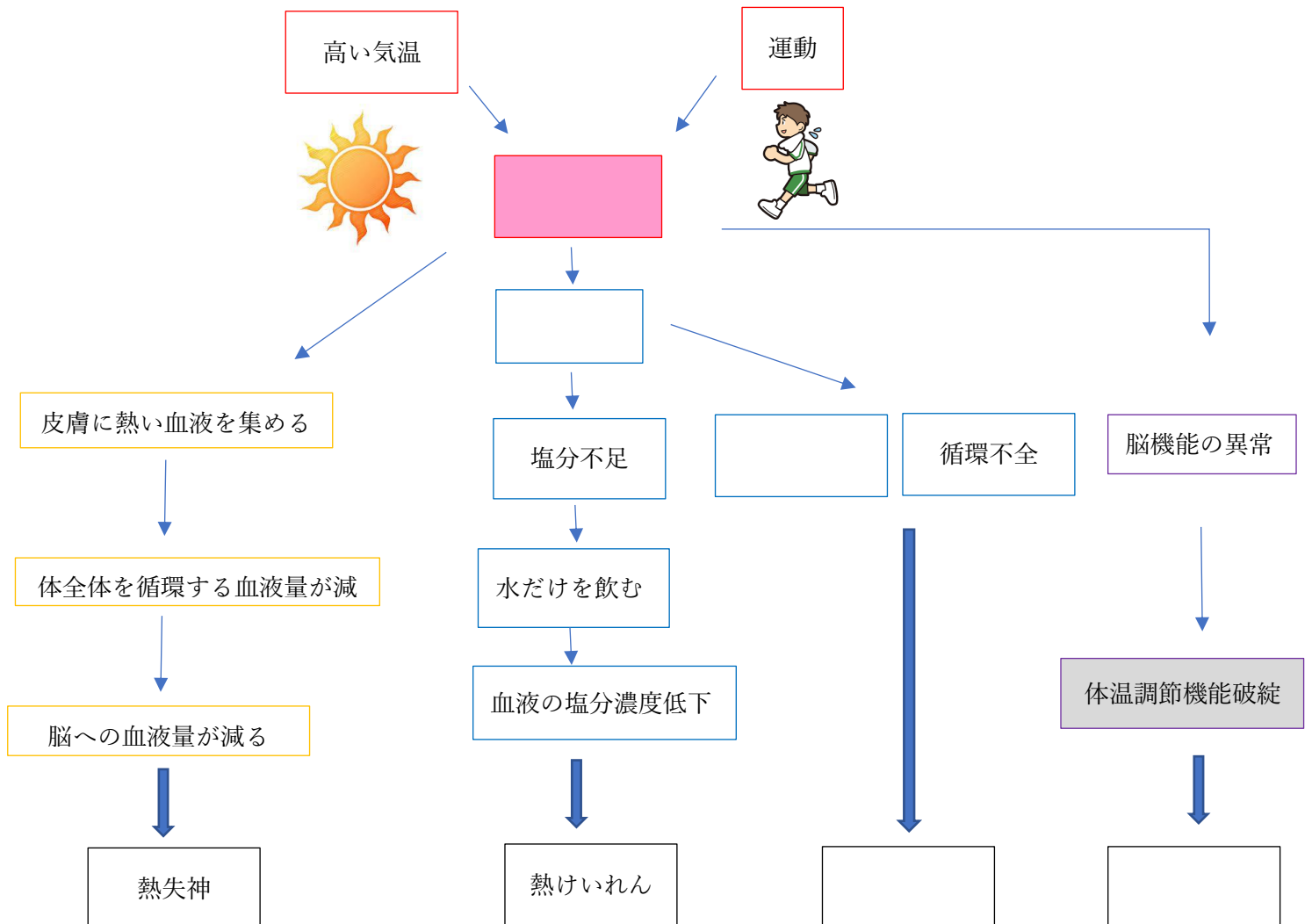
②

③

④

1人の時は？

【3】体の中では何が起きている・・・？



①

②

「高等学校保健体育科授業の充実」を受講して

期 日 : 令和4年7月1日(金)
場 所 : 秋田県総合教育センター
氏 名 : 土井 さくら

研修の目標

学習指導要領の保健体育科の目標及び内容を具現化した授業づくりのための実践力を養う。

受講内容

- | | |
|-------------|--|
| 10:20～12:30 | 〈実技・演習〉 これからの保健体育科の授業づくり
・ 育成を目指す資質・能力「3つの柱」について
・ 全国、秋田県の生徒の現状について
・ 単元の指導と評価の計画について
・ 自校における教科指導上の課題について |
| 13:30～16:15 | 〈実技・演習〉 これからの保健体育科の授業づくり
・ 模擬授業の構想
・ 模擬授業提示
・ まとめ、振り返り |

受講のまとめ

午前の講義では、学習指導要領改訂のポイントである資質・能力の「3つの柱」を確認した。指導と評価についても、評価の時期や回数はもう一度見直してみる必要があると感じた。

また、各高校の先生方と自校の保健体育科授業の課題や悩みについて協議した。支援を要する生徒についての指導と評価について、体育授業でのICT活用についての意見が多く出た。映像で自分の動作を確認することに加えて、運動量を確保するために、遅延再生アプリで即時フィードバックの活用事例を聞いて取り入れたいと感じた。また、生徒の振り返りや、評価の手助けとして実技テストなどの映像を残しておくという案も出た。活発な意見交換がされて良い機会となった。

午後の演習では知識や技能を「活用・発揮」させる授業づくりを行った。3つの班に分かれ、バレーボール、バドミントン、バスケットボールの中から1種目選び、20分間の模擬授業を行った。主体的・対話的で深い学びを作るというテーマで、私の班ではバレーボールを教材に取り上げた。他校の先生方を生徒役にして授業をするのはとても緊張し、生徒の深い学びにつながる授業をすることの難しさを感じた。他の班の授業はとても参考になった。バドミントンでサーブの打つ位置を工夫して次の展開を予測したり、バスケットボールでフリースローのフォームについて考えながら体を動かしたり、体を動かすことに加えて生徒の思考が働く瞬間が多くあったように感じる。教材研究、授業作りにまだまだ改善の余地があることが分かった。今回の保健体育科の研修で学んだことを日々の授業に生かし、積極的な授業改善を行っていききたい。

「これからの運動部活動の在り方」を受講して

期 日 : 令和4年5月20日(金)
場 所 : 秋田県総合教育センター
氏 名 : 齊藤 広樹

研修の目標

運動部活動運営に関する国や県の現状を知り、運動部活動を通してどのような力を身に付けさせるかを考えるとともに、危機管理についての実践力を養う。

受講内容

10:00	挨拶	総合教育センター 主幹 小玉 克男
10:20	運動部活動の現状と今後の展望	保健体育課 副主幹 野中 仁史
	運動部活動の教育的意義	保健体育課 指導主事 佐藤 幸彦
13:30	講義 「運動部活動での事故防止と応急手当」	秋田大学大学院医学系研究科 准教授 奥山 学
16:00	振り返り	

受講のまとめ

運動部活動の意義は、学校教育の一環として、生徒の自主性に応じて行われており、より高い水準の技能や記録に挑戦する中でスポーツの楽しさや喜びを味わい、競技を「すること」のみならず、「みる、支える、知る」といった視点からスポーツに関する科学的知見やスポーツがもつ様々な良さを実感しながら、自己の適性等に応じて、生涯にわたるスポーツとの豊かな関わり方を学ぶなど、各学校の教育課程との関連を図る中で、学校教育が目指す生きる力の育成、豊かな学校生活を実現させる役割を果たしている。

そんな中で、昨今運動部活動に求められる点として、「適切な休養日の設定」、「適切な指導による自主的、自発的な活動の推進」、「複数校との合同活動や複数顧問などの適切な体制整備」など多岐にわたり、運動部活動の在り方が問われているのも事実である。

「事故防止対策や感染症拡大防止対策」など、規制を多く受けてきた生徒の世代が学校全体を占めている現在、教員の指導力向上は、単に技術指導に偏るものではなく、豊かな人間形成を導く力へとシフトチェンジしたことは言うまでもなく、そんな中でも生徒自身が「やりとげた達成感」を実体験させることが重要である。

中学校における「外部指導員」の導入により、部活動のスタイルが大きく変革しようとしているこの時代に、「温故知新」、不易と流行の見定めだけは誤らずに、私たち教員は絶えず研究と修養に励んでいかなければならない。

「高等学校道德教育推進研修講座」を受講して

期 日 : 令和4年6月10日(金)
場 所 : 秋田県総合教育センター
氏 名 : 佐々木 勝則

研修の目標

新学習指導要領の趣旨を生かした道德教育についての理解を深めるとともに、道德教育の実践的な推進力を身につける

受講内容

10:00～10:20	開会行事・オリエンテーション
10:20～11:45	〈講義・演習〉道德教育の今日的な課題と学習指導要領の改訂
12:45～14:25	〈実践発表・協議〉道德教育推進のための取り組み
14:25～16:05	〈講義・演習・協議〉道德教育の推進体制の充実
16:05～16:15	研修の振り返り

受講のまとめ

今回この高等学校道德教育推進研修講座に参加して、改めて高校で求められる道德教育の重要性を考えさせられた。まず、「子供達の心の成長が遅くなっているのではないか？」という大人達が感じている疑問が高校でも道德教育を意識しなければならない背景にあることを知り、心の教育の大切さを実感した。また、高等学校の学習指導要領に頻繁に見られる「人間としての在り方、生き方」という言葉が道德教育でも使われており、これについてきちんとした考えを持たせることが、高校教育の最大の目標であることを改めて認識した。

高校での道德教育の実際の取り組みとして、横手清陵学院高校と秋田工業高校の実践報告があった。両校ともに道德の授業を生徒に行っており、意識の高さを窺うことができた。両校に共通していることは、「まずはやってみる」とことと、最後に無理にまとめようとせず、生徒にいろいろ投げかけて終わらせるのも一つの手段として取り入れていることである。また、教材選びも大切であることを学ぶことができた。本校ではLHR等の時間を利用した道德に特化した取り組みは行っておらず、この2校の取り組みの実践発表は大変参考になった。そして、小中学校では授業で道德教育を行っているため、機会があれば授業を参観して、高校での道德教育の参考にできたらと感じた。

また、この講座に参加した教員と、各校の道德教育の現状の報告と、今回の研修を踏まえた各校でできる取り組みについて話し合いを行った。この協議で、どの学校も直接的な道德教育を行っていないことがわかり、今後の課題であると感じた。

この研修講座に参加して、年度ごとに道德教育推進教師が変わることが、本校でのもう一つの課題だと思っている。これをきっかけに、今後も道德教育について考えを深めていきたい。

編 集 後 記

多くの先生方の御協力により令和4年度『研究紀要』を刊行することができました。コロナ禍による制約が徐々になくなりつつあるとはいえ、以前のような教育活動はまだできないまま年度末を迎えようとしています。一方でタブレットや電子黒板のある授業風景が板についてきた1年でもありました。ICTを活用した授業実践など、授業改善課題への取組が広がってきていると言えます。

新学習指導要領全面実施2年目に向けて「ICTで思考力・判断力・表現力を育む」授業実践等のための教員研修はこれからますます重要になると思われます。今後も授業改善等教員の資質向上につながる取組を全職員の共通理解を図りながら進めていきたいと思っています。

年度末のお忙しい中御寄稿下さいました先生方、さまざまな形で編集に御協力下さった皆様に、心より御礼申し上げます。これらの研修を今後も継続し、より一層指導力の向上に努めていきたいと思ひます。

教務部（研修担当）